



地域研究集会

第 10 回日本海研究集会
「水中グライダー等の新しいモニタリング手法を活用した
日本海中部海域における水産海洋研究」

日 時：2021 年 12 月 17 日（金）9:30～16:45

方 法：Teams によるウェブ会議（事前予約制：参加希望者は 12 月 13 日までに井桁
(igeta@affrc.go.jp) までお知らせ下さい。招待メールをお送りします。）

共 催：水産研究・教育機構水産資源研究所，東京大学大気海洋研究所

コンビーナー：井桁庸介・和川拓（水産機構資源研）・川口悠介（東大大気海洋研）

挨 拶：木村伸吾（水産海洋学会長）9:30～9:40

趣旨説明：井桁庸介（水産機構資源研）9:40～9:50

話題提供

座 長：千手智晴（九大応力研）

1. 日本海中部海域をモニタリングする佐渡沖定線 SI-line の設計とその狙い
井桁庸介（水産機構資源研）・SI-line チーム 9:50～10:15
2. 水中グライダー観測によるこれまでの研究成果と今後の展望
和川拓（水産機構資源研）・SI-line チーム 10:15～10:40
3. 佐渡沖（FATO）係留の成果報告：対馬暖流フロントの蛇行流と近慣性内部波の関係性について
川口悠介（東大大気海洋研）・SI-line チーム 10:40～11:05
4. FATO 新青丸航海（KS21-12）の速報：大和海盆における渦解像乱流観測の解析結果
矢部いつか（東大大気海洋研）・SI-line チーム 11:05～11:30
5. 能登半島東岸斜面上での近慣性内部波による乱流の観測
久賀みづき（北大低温研）・SI-line チーム 11:30～11:55
- 昼休憩— 11:55～13:10

座 長：和川拓（水産機構資源研）

6. 日本海域のアルゴフロートデータと上部固有水の温暖化
千手智晴・塩田幸平（九大応力研） 13:10～13:35
7. 日本海における懸濁態有機物の炭素窒素安定同位体比の時空間変動
児玉武稔（水産機構資源研） 13:35～14:00



8. 佐賀県玄海地区定置網におけるリアルタイム海洋環境モニタリング
山崎恵市（水産機構開発セ）・岩原由佳（水産機構開発セ/資源研）
・北野 載・廣田将仁（水産機構開発セ） 14：00～14：25
9. 荒天時でも可能な海洋観測
渡慶次 力（福井県大海洋生資）・山田和也（宮崎水試）
・清水勇吾（水産機構、現水産庁） 14：25～14：50
- 休憩— 14：50～15：00
- 座 長：川口悠介（東大大気海洋研）
10. 日本周辺海況予測システム FRA-ROMSII の開発と活用
阿部祥子（水産機構資源研） 15：00～15：25
11. 佐渡島北西海域における動物プランクトンの変動
竹内茉莉香（The National Oceanography Centre）・SI-line チーム 15：25～15：50
12. 佐渡北西海域におけるカイアシ類ノープリウス幼生の群集構造の変化
中江美里（水産機構資源研）・SI-line チーム 15：50～16：15
- 総合討論
座 長：井桁庸介（水産機構資源研） 16：15～16：40
閉会挨拶：井桁庸介（水産機構資源研） 16：40～16：45

趣旨

日本海の生物・水産資源研究を行う際、環境的差異を背景とした能登半島を境界とする東西区分による議論が多くなされてきた。一方で、日本海中部海域におけるブリやクロマグロ等重要水産資源の分布・回遊の特徴を理解するには東西区分がうまく機能しないことが多く、日本海中部海域の海洋環境変動を理解する必要がある。しかし、対馬暖流・渦の挙動の複雑さや、冬期の時化による観測の困難さが原因で、日本海中部海域がもつ海域的な特徴の理解は進んでこなかった。近年、従来の観測的研究がもつ問題点、つまり、船舶観測が不可能な海域・時期のデータの獲得を、新たな観測手法の活用、データ同化モデルを用いた推定により解決し、海況を把握する努力が様々な海域で行われている。このような試みが日本海中部海域を中心に精力的に遂行されており、データの蓄積、海域特性の解明が大幅に進んでいる。そこで、日本海中部海域における、近年の水産海洋学的研究による学術・技術的な成果を共有し、隣接する海域も含め実施・計画されている新たな手法を用いた調査の情報共有を通し、連携の可能性等を探りたい。